

美の担い手たち

伝統の中から

室町時代から受け継がれてきた能楽。シテ方(主役)を演じる五流派で唯一、流派樹立から約四百年にわたり、女性の舞台人の育成に門戸を閉ざしてきた喜多流に四年前、初の女性能楽師が誕生した。大島衣恵さんだ。

「ワキ、囃子などみんながシテを盛り立て、意識が一つになって成り立つ。持続させた緊張感に生まれる充実感が演者としての醍醐味。お能以上にやりたいものはない」

大島家は、全国に二十家ある同流系家直系の職分。福山藩能楽師羽田家が明治維新後、途絶えたため継承した。福山市中心部の自宅に能楽堂を構



喜多流能楽師 大島 衣恵さん(31)

—福山市光南町—

え、衣恵さんは、舞台も練習も生活の一部という環境で育った。二歳で初舞台。子方など務めたが、中学生になると、流派の方針に従うように出演が減っていく。「サポート役に回った方がよいのか。でも舞台に出たい」。葛藤が続いた。

転機が訪れたのは東京芸術大邦楽科在学中。他流派でシテ方を務める女性能楽師と交流するうち、気持ちが高まっていった。「能楽界には女性がいて、今では支えにもなっている。私の流派でも能楽師としてやっていける可能性があるはず」
大学卒業後、同流への働き掛けが実り、能の修練に励む。「男女に関係なく、内面にあるものが

内面のもの 舞台に出る

舞台に出る。いくら技術が良くても、人間が円熟していないと出ないものがある」と衣恵さん。二〇〇四年に他界した同家三代目久見さんのような静かな舞で魅せる舞台を目指す。

「難しい」「敷居が高い」といった世間の能への先入観がゆい。「物心が付く前に違和感なく日本文化に接するチャンスをつくりたい」と岡山、福山市内の小学校などで積極的に普及活動を行う。八年目に入った岡山市立三蔵小では、毎年六年生を対象に、能面を見せて解説、謡や仕舞を指導し、後楽園能舞台で成果を披露する。「お能は堅苦しくも古くもない。面白そうだと思うてもらえたらうれしい」(亀井友美子)

おおしま・きぬえ 1974年福山市生まれ。明王台高、東京芸術大邦楽科卒。国の重要無形文化財総合指定保持者の祖父久見氏、父政允氏に師事し、98年には喜多流の女性で初めて能楽協会に登録された。比治山大客員教授。